

◇◇◇◇◇ 紹介 ◇◇◇◇◇

大橋昭夫・平野日出雄著

『明治維新とあるお雇い外国人—フルベッキの生涯—』

フルベッキについて、医史学家にどれほどの知識があるうか、いな、どれほど誤解していることか。少なくとも私のフルベッキの認識程度は、大学南校の御雇教師ぐらいで、たいていの教科書に書いてある、明治二年相良知安と岩佐純がドイツ医学(教師)導入を画策していた時、イギリス医学(ウイリス)採用を推す一派と激論となり、危くフルベッキのドイツ医学が世界で一番優れているとの一声で決着したとの逸話、また肝腎のドイツ医学導入の恩人が後日、来日したミュラーによって「錠前屋あがりの無学な人物」と嘲られた皮肉、——と、そんなところである。ただしミュラーの名誉のために断っておくが、彼は南校の教師の程度の低さをあげつらい。「(同校)校長の椅子に座っていたのはアメリカの宜教師で、手職は錠前師、日本の官庁の顔色を伺い、御機嫌取りに汲々する以外、何の取柄もない人物であった」と、「フルベッキ」とはあえていっていない(小川鼎三ら、一九七五)。これを流布させたのは入沢達吉(一九三三)であって、彼曰く「是(錠前屋云々)はフルベッキのことと思はるゝ」と。つまりはだんだん尾鱗が付いてきたものであらう。

フルベッキは一八三〇年オランダに生まれた。「信仰深くて教養のある芸術好きな」一家と、自由で民主的なプロテスタントの風土に育まれる。ユトレヒトの理工科学校を終え、一八五二年アメリカに移住する。当時のアメリカは「民主主義が健康でいきいきとしていた時代」だった。やがて神学校に学び東洋伝道を志す。一八五九年、上海を経て長崎に上陸する。しかし、当時切支丹禁令下で直接の布教は困難とみて、縁あって幕府の英語学校「済美館」の教師となる。信教(布教)の自由が確立されるためには何よりも「日本の近代化」「自由と民主の市民的な政治体制」が必要と、一見遠廻りの教育啓蒙に専念する。やがて大学南校教頭に抜擢される。ここで専門教育の土壌作りが完了すると、specialistでない彼は解雇され、明治六年政府の法律顧問、法典翻訳等に廻される。彼は謙虚で業績を誇ることなく、また野心がなく口が固いため、ポアンナードのような華々しさはない。しかし明治初期の政府高官に自由と民主を植え付けた功績は——たとえ、その後日本がドイツ帝国主義に急傾斜していくとしても——計りしれないと著者は強調する。就中、明治九年の民主的な「国憲第一次草案」起草を始め、多方面の法律作成に関わった功績を発掘評価している。やがて彼は明治十年「君権強化」を敷く政府から態よくお払い箱となる。それで、やっと本来の布教に専念でき、現・明治学院大学の創設に関わるなど、来日目的を漸くとげる。ともかく、若干の注文はあるものの、初めてのまとまったフルベッキ伝の誕生を多とし、御一読をおすすめする。

(小関 恒雄)

桜井寛・小清水敬昌・西谷篤彦編集
『医薬品発見・命名小辞典』

病院において薬を扱う業務に従事している人々によって書かれた本書の本来の目的は、薬の名前を正確にかつ容易に覚え薬効や特徴をつかむことにより、正しい処方方の読み方や監査を行うことを通して医療に貢献するものであることが序文から読み取れる。

現在登録されている医療用医薬品は、約一万七千品目あり、すべてが名称を有している。新医薬品の場合この名称は、誕生するまでの開発の過程で次々と変化していくが、最終段階の保険使用価格（薬価基準）を告知する官報には商品名が記載される。本書はこの商品名について、その命名の由来を説明するとともに発見の経緯を併記した事典である。

医薬品を命名する側の製薬会社では、長い年月と莫大な費用を投じて研究開発した新薬が、競合品の多い市場に滞りなく広く浸透し医療のニーズに迅速に応えることを願って、その薬剤の特徴をもちこんだ簡潔で覚え易い名称を考え出す。命名の中に、誕生までの歴史や願いがこめられている場合が多い。名称から、その中に潜んでいる歴史や特徴などを導き出しているのが本書であり、ユニークな事典といえよう。

これらを「医薬品命名、由来の分類」の項では、「日本古来の

薬品名には調痢丸（下痢を調える薬）などのように具体的効能を示すものもあったが、どちらかといえば長寿丹、延寿魂丹などのように不老不死を意味する名称のものが多かった。それが時代の推移とともに人智の進歩、医学、薬学の発展に伴い、西洋科学的手法による薬理作用が明らかとなり、薬の商品名も薬理作用や病名に基づくものなどが多くなってきた」と述べて、総体的に六つに分類している。すなわち成分、原料に由来するもの、病名ないし適応疾患に由来するもの、薬効、薬理作用（含作用部位）に由来するもの、臓器、器官名に由来するもの、会社名、地名、人名などを取り入れたもの、その他、としてそれぞれに多くの具体例をあげ、説明している。

また「総論」では、新開発医薬品の一般的名称命名の手続きを解説し、WHO薬効別システムを記載している。

巻末の「医薬品名アラカルト」は、アスピリンとスピール膏、インシュリン、ビタミン、ホルモン、抗生物質、造影剤、ワクチン、ウイルスなど二五項目について、化学構造と薬理作用、森林浴や蛇毒にルーツを探る発見と歴史、ギリシア神話などを織りこんだ命名の由来等を随筆風にまとめた面白い読物となっている。

このように医薬品名の理解のために、命名の由来と発見の経緯を併記して、その医薬品の薬効と特徴も知ることを意図した本書からは、さらにその医薬品誕生の背景や歴史をも読みとることができるのである。

（高橋 文）

〔薬事新報社 一九八八年 A五判 三二〇頁 三、七〇〇円〕

小曾戸洋・真柳誠解題

『明・趙開美本「傷寒論」、清・陳世傑本「金匱玉函經」、元・鄧珍本「金匱要略」』

今回この中国伝承の最古の刊本が影印され、親しく入手観見できるとなつたことはまことに喜ばしい。内容を簡単に紹介し、二、三の感想を述べらる。

『傷寒論』は、明の趙開美刊の仲景全書のその部を影印したもので、影印部（四六八頁）に凡例目次（四頁）を付す。従来の本と著しく異なるのは、太陽より厥陰までのみならず発汗吐後病までの各篇のはじめに、一字を下げて薬方のある條が記載されていることである。これは明らかに本文と重複している。簡潔を尊ぶ漢文としてはまったく異常である。また宋臣の校正のとき重複を除去したという序文と矛盾する。趙開美の刊行のとき異本を付加したのかの疑問も起らう。

『金匱玉函經』は、清の陳世傑の刊行本を影印（四一八頁）し、凡例目次（六頁）を付す。『傷寒論』の異本として知られているが稀覯本である。両者を比較すると興味がある。『傷寒論』では「脈証并びに治を辨ず」が「形証治を辨ず」となっている。また『傷寒論』では太陽篇のはじめに、「太陽の病為る脈浮頭項強痛而して惡寒」とあるのを、本書では第二條に「太陽の病為る頭項強痛而して惡寒」と次條に「太陽病其の人脈浮」と二條に分けている。また七條にある「夫れ発熱して惡寒するのは陽に発するなり云々」が本書では第一條に出ているなど枚挙に暇ない。

厥陰篇はわずかに四條しかない。次に厥利嘔噦病篇がある。ここで想起するのは貞元本康治本ならびに康平本（一字を下げた條を除くと）では文章は異なるが三、四條のみである。など今後研究すべき興味ある課題が多い。

『金匱要略』は、元の鄧珍の刊本の影印（一七〇頁）に凡例目次（四頁）さらに卷末に小曾戸洋、真柳誠両氏の解題（一二頁）さらに卷末に三書の処方索引（二五頁）が付してある。古来『金匱要略』は誤字脱字錯簡が多く読解困難な所が多いとされているが、この本は清朝末の書誌学者楊守敬が善本であると識語したこと、解題者により他本に比し誤字が少くないという。事実石原氏の兪橋本は雞屎白散や蜘蛛散などが脱落していることはその証左となる。しかし版木の磨滅による印刷の不鮮明と誤字（たとえば抵覚湯）も少なくないので、テキストとして使用するのには異論もあらう。

「解題」は、『傷寒論』の由来伝承については、古くは多紀桂山の輯義、近くは石原の影印本出版の際の解題、大塚の『傷寒論』解説などにみられる。小曾戸、真柳の両氏は内外の図書館を歴訪し、実物を手に取り、新たに古い文献を照合調査して明快に解説された。その文は精緻を極め多大の感銘を与えた。その努力と労苦とに対し、はじめに敬意を表したい。筆者がとくに印象的であったのは（一）石原の影印趙開美本（燎原書店）は江戸医学館の堀川本である。（二）日本で刊行された仲景全書と趙開美のそれとは内容が異なる。（三）清水敬長（山脇東洋の弟）が『金匱玉函經』を刊行した。（四）『金匱要略』に無名氏刊本があるなどである。

本邦で流用された成無己の本もその伝承、古い刊本についても
つと言及してほしいとの意見もあるが、それは本書の範囲を逸
脱するので、論述のないのは当然である。

以上要するに影印本は貴重なもので『傷寒論』『金匱要略』の
研究者は必ず坐右に備うべきであり、その解題は『傷寒論』『金
匱要略』を読まんとする者の必読の文章であるのみならず、書誌
学的にも貴重な文献である。

広く江湖に推薦する。妄評を多謝す。

(長谷川弥人)

〔燎原書店 一九八八年 一一、〇〇〇円〕

宗田一・蒲原宏・長門谷洋治・石田純郎編著

『医学近代化と来日外国人』

本書は一八二三年来日したシーボルトに始まり、幕末から明治
初期にかけて、日本医学の近代化に貢献した医師六〇名につい
て、その履歴、活動状況などについて書かれている。これは雑誌
『臨床科学』に二年余にわたって連載されたものを一冊にまとめ
たものである。この四人の編者は日本医史学会の重鎮として、そ
れぞれの研究分野で優れた業績をあげておられ、著書も多い。執
筆者は編者を含め一六名（内一名はオランダのボイケルス教授）
である。これまでは、長崎、東京で活動したシーボルト、ポン
ペ、ウイリス、ベルツなどについては、史伝がたびたび書かれ、

単行本として、あるいは本人の紀行や自伝的なものが翻訳出版さ
れている。本書では、これらの人口に膾炙している人達を含め
て、地方では大きな貢献をしたが、中央にはそれほど名も知られ
ず、また今やその活躍した地方ですら名前も忘れ去られようとし
ている医師達をとりあげている。これらの人達についてのまとめ
った記録もなく、史伝について不明なことが多い。これまでは原
資料にあたらず、先人の記述がそのまま誤って転写されている例
も多い。執筆者の多くは、資料蒐集のため来日医師の母国へ飛
び、あるいは文献資料を取り寄せ、また日本における足跡を自分
の足でたどるといふ苦勞を重ね、蓄積されたことと推察する。こ
のような努力で、これまで不明であった出自、学歴、職歴、終焉
などが明らかにされた。多くの肖像や資料の写真が掲載されてお
り、記事の内容を読者にいっそう身近なものとして、興味深く読
ませてくれる。

これらの来日外国人医師達によって、啓発された若き日本の医
師達は、官費、私費留学生として続々欧米に渡り、新知識、技術
を身につけて帰国した。この新婦朝の医師達は、教育、診療、医
療行政の分野で重要な位置を占め、近代化の基礎造りを行った。
遠い東洋の未知の小国へはるばるやってきた勇氣ある外国人医師
の活動の足跡を知り、自分らの明日の糧とするために、ぜひ若い
医師や学生諸君に本書の一読をすすめた。

わが国の国立大学で医史学講座が皆無の現状で、本書の執筆
者のはとんどが、私費を投じて研究してこられたことに敬服する
と同時に、反面日本の医学の浅薄さを痛感する。

なお、本書の末尾に「付録」として、本文では記述されなかった多数の医学関係の来日外国人（もちろん上述の六〇名も含む）の国籍、生没年月日、在任地などが活動分野毎に一覧表としてまとめられている。今後この方面の研究を志す人には大変参考になる。

なお一部の論文で、文献の記載がなかった。これはもともと執筆者の原資料発掘が多いため、止むをえなかったかもしれないが、自著をはじめ文献などの記載が洩れていたことは心残りである。

（中山 沃）

〔世界保健通信社 一九八八年 B五判〕

一九四頁
五、三〇〇円

立川昭三著『見える死、見えない死』

このやや特異な表題の本は、著者が一九八四年から一九八八年の間に種々の機会に発表した論文や随想をまとめて一冊としたものである。『見える死、見えない死』はその中の一つの文章の題を取っている。

この一冊にはその他の内容も含んでいるので、この題で必ずしも内容の全体を表わしているのではないが、著者としてはこの題目にかんがりの思い入れがあるようである。「死」を話題にすることをあまり好まない日本人に対して、著者は「メモント・モリ（死を想え）」と呼びかけているのである。

日本人は厳しく「死」と対決してこれを思想化し宗教化するところが希薄な民族らしい。それがとりもなおさず日本人の無宗教性なのだろう。著者も述べているように、「死」と関連して神仏に詣でる人もせいぜいポックリ死ぬことを願っただけなのである。

それでも過去の日本人は現代の日本人よりも否応なしに「死」に直面する機会が多かったから、浄土宗や禅宗が庶民や武士の心をとらえたのだろう。著者は日本の浄土教の原典といわれる平安時代の源信の『往生要集』あるいは鎌倉時代の良忠の『看病用心鈔』を引用して、昔の人がいかに正面から「死」と向き合い、いかにターミナルケアを重んじたかを説いている。現代人がいくらか寿命が延びても死ぬことには変りがないはずである。「メモント・モリ」。

この他に著者がこの本で取り上げている主題は、これもこの中の一つの文章の題を代表としてあげれば「病いをめぐる心性と習俗」である。著者の他の著書でも同様だが、著者はただ医学史や医療史を述べるのではなく、病いと人の心のまじわりを掘り下げ、それを文明的な視点から批評しているのが特徴である。それは歴史学出身の著者の強みであろう。

目配りし引用している文献の範囲もきわめて広く、それらを縦横に利用して「氣」と日本人、「持病」と日本人、疫病に関わる祝祭等についても考察をめぐらしている。

著者のこれらの方法論は当然のことながら現代の医療問題にも応用がきかなくてはならない。著者はこの本の中の「現代におけ

る病いと癒し」「時代を語る病い―梅毒・エイズをめぐる―」「時代の登音の中で」等の文章でその方法の切れ味を見せている。

著者は「あとがき」の中で「私としてはいささか節度をこえ、現代や文化の広い問題に踏みこみ、自省の念にかられているし、またうかつに自分をさらけ出したところもあり、後悔の念がないではない」と書いている。著者はまたある編集者から「あなたの文章は人をおびやかす」といわれたとも書いている。

思うにこの一冊の書は、(すべての本がそうかもしれないが)読者が著者と対話しながら自らもその問題を考えることをしいられる本なのだろう。「生死」の問題から眼をそらさない人に一読をおすすめしたい。

(中村 昭)

〔筑摩書房 一九八八年 一四cm×二〇cm 二四六頁〕

一、四〇〇円〕

吉元昭治著『道教と不老長寿の医学』

本書には大きく見て二つの特徴がある。その一つは中国医学と道教の関係、いま一つは中国医学の底辺ともいべき民間療法との紹介である。

著者の吉元は、道教との関わりについて、『素問』上古天真論を読んだ時に始まるという。さらには道教の経典である『正統道藏』の中に、中国医学の重要な古典である『素問』、『靈枢』、『千

金方』などが含まれていた事から、一層の興味を覚え、本格的に道教の研究を開始した。彼は医師でありながらも、道教研究の第一人者大正大学の吉岡義豊教授の門に入り、さらには文部省科学研究班「道教と科学」の班員に自然科学方面からただ一人の参加者となった。この時学んだ人文科学的手法が本書に十分生かされている。

彼は本書を書くにあたり、特殊な視点からアプローチを試みた。その一つは、ふつうある歴史あるいは文化を語る時、過去から現在へと見るのがあたり前であるが、彼は逆の立場をとり、たんなる古典の研究に留まらず、現在残っている中国民族の民間療法の中から、実践医学としての古い道教医学の片鱗を見いだそうとした。そのため、彼はしばしば台湾、香港を中心とした東南アジア諸国を訪れ、足で探索した成果を数多く本書で紹介している。たとえば薬籤と呼ばれる病気や薬名を記したおみくじとか、各寺院や道院、廟で集めた善書中の民間療法の紹介、さらには青草店(生の薬草を売る店) およびそこで一般に売られている青草の紹介など、実際現地を訪ね調べたものでなければ解らぬ現場の情景が写真も加えあますところなく紹介されている。とくにこれらのカラー写真はめずらしいものも多く、民俗学的視点からみてもおもしろいものがある。

いままで道教にしろ、中国の民間療法にしろ、医学の分野からは、学問としてアプローチされることのまったくない分野であったが、いま中国や日本で氣功法が注目され、氣功麻酔までが出るに及んで、氣について科学のメスが入られようとしている現在、

氣功法もまた道教をその源流とするものであることを考えあわせれば、著者の「中国医学の底にあるものは何か、何故数千年もつづいてきたのか、またその支えになったものは何か、等について、思いをいたさねばならない時期にきていると思う」という言葉に思い半ばに過ぎるものを感じる。

著者の一貫した立場は、中国医学の根幹には道教があり、中国医学を肌で感じようと思えば道教の中に入って行くべきであるとの主張にあるが、小生の読後感としては、医学もさることながら、本書によって、中国民族の文化の根底に触れた思いがした。また連綿と生き続けている民衆の歴史の息吹きを十分に伝えてくれる好著であった。

(根本 幸夫)

〔平河出版社 一九八九年 A五判 三三七頁 二、八〇〇円〕

石原明・杉田暉道・長門谷洋治著

『看護史』(系統看護学講座別巻9)

終戦後まもなく、看護制度・教育の大改革が行われた。その新しい看護教育の船出の時代に「赤本」といわれ信頼され親しまれていた一連の看護の教科書があった。当時から十数年はこの「赤本」といわれる教科書のみしか看護書はなく、この中に石原明著の『看護史』が一冊独立して入っていた。この看護史は日本も含めて世界の主たる国々の看護の歴史が懇切に述べられていて豊

かな内容を誇り看護界で名著と評価されていた。

しかし、高校卒業後間もなく看護史を教わる初学者にとっては繁雑とも、あるいはこれが看護の歴史なのかなと思われる部分もあって、学生達が興味をもって自ら読むということは少なかつた。が、他に類書もないまま、この「赤本」は日本全国の看護学校でテキストとしてながく採用されてきた。

時を経て他の看護史もいくつかが発刊されたが、「赤本」(一名石原看護史)にとつてかわるものは見られなかった。

一九七一年に、杉田・長門谷氏が共著者になられ、その体裁が改められた。しかしまだ、学生にとってはあまり興味がもてるものではなかった。近年は活字の多い書物は学生に好まれず、どんなに内容が良くてもそっぽをむかれる。そのような若者気質を著者らは良く理解されて、今回の大改訂をなさったのであろう。

「赤本」から各版のものと、今版のものを並べて見ると、著者らの改訂のご苦心がひしひしと伝わってくる。このご苦心は、若者気質云々のみではなく、看護教育における看護史の位置づけが、独立科目から看護学総論に包含されたという経緯とその主旨を十分にふまえてのご苦心の大改訂である。

章も節も項も、新しい切り口で見事に再編成されている。いかえれば看護学総論の中で、看護史の授業が展開しやすく、いやできるようにと工夫されている。限られた少ない授業時間の中で人類の歴史とともにあった看護を語ることは不可能である。教師はそのポイントを示す時間しかもたず、あとは学生の自己学習に待つ他ない。となると学生が自ら手にとって読もうという気を起

させるものでなくてはならない。

何名かの新入生に旧版と新版を見せた。一〇〇%新版の方が興味が湧くという。写真によって事実が証明されるので、歴史が好きになればそうだとか、これなら通学の電車の中でリラククスして読めるとかいう。次は教師がどう活用するかであるが、重要事項が簡、かつ要を得て述べられているので授業展開がしやすい。よくも見事にここまで内容を精選され、なおかつ現代に活用される編成になさったものとただただ敬服するばかりである。

看護への理解をいっそう深めていただくためにもこの本は多くの一般の人々にもぜひ読んで欲しい。

心からの讃辞を捧げつつ正直に述べさせていただいた。

(山根 信子)

〔医学書院 一九八九年 B五判 一九九頁 一、四〇〇円〕

宗田一著『図説 日本医療文化史』

わが国の医学史・医療史としては、富士川游の『日本医学史』をはじめ、数多く刊行されてきた。専門的一分野の歴史を扱ったものの多くは、サイエンスとしての医学の発達史として書かれているため、医師でも専門外の者には興味少なく、まして一般人々にとっては近寄りがない存在であった。このことが医学史研究の有用性を妨げる一因となっていたと考えることもできる。他面、通史としての医学・医療史は時間と空間の大きさ、さらにわが国

特有の複雑性の故に、要領よくまとめようとすれば深さに欠けることとなるのは致し方なかった。しかも医療はたんに科学としての医学のみで成り立つものではなく、多くの政治的・社会的要因によって変遷してきた。この傾向は近年とみに著しく、その意味で医療史は文化史であるべきである。この複雑なわが国の医療文化史を、医学史研究者・平均的な医療関係者さらに一般人々、三者すべてを満足させる書物として、このたび宗田一先生著述の『図説 日本医療文化史』を私は紹介したい。

本書は著者が、『ノイエ・インフォーマ』(日本ベリンゲンゲルハイム社発行)誌上に、一九七九年一月から八六年十二月まで、実に八年間九六回の長期にわたって連載したもので、これに新史料を補足して一書にまとめたものである。美麗な錦絵印刷のカバーに包まれたB四変型判四八三頁の大型豪華本である。

内容をみるに年代により、序説、古代・中世、近世、近代に四大別し、これをテーマによって二五の章にわけ、各章は三〜四の節に、さらに各節は数個の小項より成り立っている。たとえば、近代の部は、一五章「近代医学教育にむけて」、一六章「洋方医学の定着」、一七章「近代への陣痛」……二五章「医療福祉政策」まで一章より成り、一五章は、一五―(一)長崎の西洋医学伝習、一五―(二)コレラの侵入・一五―(三)麻疹の流行にわかれ、さらに、一五―(四)は、前任の蘭館医ファン・デン・ブルック／ポンベの医学伝習／洋式病院の建設の小項より成っている。これらの分類やタイトルに著者の歴史観を読みとることができる。また「図説」の名が示すように、全巻にわたって、カラー五〇〇点、モノクロ

一五〇点の写真を挿入し、民俗学的・学際的な珍しいものも多くとり入れてあり、各写真には細部にわたり詳しい説明が加えてあるため、はなはだ読み易く理解し易い。近代の部の説明においても、たんに東京中心の説明に終ることなく、地方の状態にも言及し、また漢方医学の衰退、軍陣医学の発展の過程等、今ままであまり触れられていない分野にも光をあてている。さらに新史料を随所に取り入れて従来定の誤を正さんとする姿勢には注目しなければならぬ。

最後に評者の希望を申せば、本書の最終がほぼ大正末年で終わっているが、機会をみてそれ以後の現代篇を執筆刊行されることを期待する。

なお、本書は発刊間もない三月二日、京都大学人文科学研究所会より表彰され、助成金を受けたことを付記する。

(杉立 義一)

〔思文閣出版 一九八九年 B四変型判 四八三頁〕

二五、〇〇〇円〕

宮村定男著『恙虫病研究夜話』

日本の恙虫病の研究史はすでにいくつか総説が出され、その後新事実の発見・追加もないので一応定説が形成される状況でありながら著者があえてここに夜話という語をつけて恙虫病研究史に追加されようとする意図は、恙虫病研究の過去の事実の羅列を意

識的に避け、研究者相互の間に隠された人間性を引き出したと考えたからだと著者はあとがきの中で述べておられる。それは恙虫病の流行地にもっとも近接した新潟医科大学の細菌学の教授として二〇年その職にあられ、それ以前に細菌学者として若き日々に師事した宮路教授が恙虫病研究のパイオニアの一人でありながら、日本の名だたる研究者の病原体命名騒動の泥合戦の直後に恙虫病研究に嫌気がさして舞台を降りられてしまったことへの無念の思いと、御自分は化学療法を通して恙虫病にその後も深く関わりをもち続けたからである。東大医学部出身のエリート研究者たちが、協力者となり得ず、互いに競争者となって病原体発見の榮譽をとりあう様は、エーテル麻酔の創始者の益と名譽をめぐって発見者と自称した人々が三つ巴の告訴合戦をくりひろげた故事に多少似かよっている。

そのような時に人間の生地が出るので、それは活字になった論文だけをいくら精読しても出てこないの、著者のようにその渦中の近くに身を置かれ、争う陣営から一歩外に立ってその空気を味わわれた人にしてはじめて筆にすることができぬ。

自分が本当のものを見た最初の人間だ（おそらく事実そうであろう）と、新種命名の論文を示す *Rickettsia tsutsugamushi* Ogata 1927 を固執された緒方規雄氏と、緒方氏より病原体を分与してもらい、原著が出ていないのを奇貨とし *Rickettsia orientalis* 1930, Nagayo et al. と発表した伝研勢と、その名前は俺が最初に出したと *Theileria tsutsugamushi* Hayashi 1906 を主張する林直助氏、それに追っかけて *Rickettsia akamushi* Kawamura and Imagawa

1931 を発表された川村麟也氏の渦の中に互いに自説を主張して相手を罵倒する研究者にはさまれ、恩師宮路教授が「しかしひどいもんだろ」と著者に語られたあたりがその真相ではないであろうか。これは医学史の史料としては書けない、やはり夜話の形をとらざるを得ない。血で血を洗うような争いの中に、荣誉を受けた教授達ではなく、その陰に実際に研究を担当して落命した研究者達のこととも淡々と詳細に触れられてある。

米国の同定細菌学便覧の学名の裁定は、*Rickettsia tsutsugamushi* (Hayashi) Ogata 1931 となつて現在はこれが使われるようになったが、これに特定した論議もまったく理にあわず、とうてい納得できないとするむきも多い。命名規約からは長与らの *R. orientalis* に分がありながらどうしてこうなったのかもベールの中である。著者も述べられたように伝研勢がその株の分与を受けて同定した折に、緒方にも敬意を表しその株を残して落命した緒方の助手北川承一氏を追悼して *Rickettsia Kitagawai* とする度量があればこんなことは起らなかったであろう。

川村麟也氏の経歴で「明治三十九年東京医科大学を卒業」は、東京帝国大学医科大学の「帝国大学」がぬけたものと思われるが同名の大学と誤る怖れがあるので訂正を要する。

(大島 智夫)

〔考古堂書店 一九八八年 一八五頁 二、〇〇〇円〕

三木通三著『京の産婦人科近代史』

かつて「京都学派」という言葉が京都大学哲学科の人々に、敬意を込めて称せられた時代があった。産婦人科でも、京大における子宮頸癌手術における高山一岡林一三林術式の伝統に対し、「京都(学派)では……」という言葉がよく使用され、京大へ手術見学者が相次いだ。京都は江戸時代賀川流産科の発祥地であり、産婦人科医家のメッカとしての地位は古い。このような京都で、現在日本産科婦人科学会地方部会、日本母性保護医協会支部、および近畿産科婦人科学会の一つとして活動している京都産婦人科医会は、そのルーツをさかのぼると、明治三十一年(一八九八)六月十五日、「産科婦人科医懇親会」の形式で発足した「京都産科婦人科会」に到達する。

本書はこれを立証し、跡付けたものであるが、著者三木通三博士は昭和五十七年第八三回日本医史学会での発表で、「京都産科婦人科会」の誕生を記録としては明治三十二年前後とした杉立義一氏苦心の研究(昭和四十八年)をさらに進めて、前記三十一年であることを明らかにした。その際「京都産科婦人科会」と「京都私立産婆看病婦養成所」(俗称「二条の産婆学校」)(後の平安産婆学校)との関連が深いことも指摘していた。今回「京都私立産婆看病婦養成所」についてのその後の研究でその全貌を明らかにし、その源までさかのぼっている。

すなわち、明治七年(一八七四)八月十八日医制七十六条が東

京・京都・大阪三府へ文部省達として出され、ここに産婆制度が確立したが（明治八年五月十四日の医制改正では産婆条文は不変）、これに伴い明治八年五月（？）京都府知事から伝統女科医の北賀川家、小笠原家への講師依頼で発足した「京都産婆会」が源である（口絵グラビアの年表では「京都産婆会」と「京都産科会」の字が入れ違っている）。これが明治十九年「京都産婆講習会」、同二十年「京都産婆養成所」、同二十五年「京都私立産婆看病婦養成所」となった。この養成所教員有志が授業終了後、夜会合をもったのが明治二十五年一月十五日発会した「京都産科（研究）会」で、この会のメンバーの呼び掛けにより「京都産科婦人科会」が発足したというのが筋である。

著者は以上の筋を『京都医事衛生誌』の記事等を丹念に調べて結論しているが、前記（？）のようななお検討願いたい箇所もある。著者によれば、本書は「京の産婦人科郷土史」であり、昭和五十八年既刊の『京都産婦人科医界沿革史』が資料篇、本書が解説篇と位置付けている。また「執拗なほど重複した説明文が出現して」いる。

しかし本書の価値は、明治以降京洛の地に生きた産婦人科医たちの働きの詳細な年表式記録と、伝記・写真等、貴重な資料の集成にある。一三年を費やした労作に深い敬意を表するとともに、とくに京都の産婦人科史は日本全体のその縮図であり、たんなる地方史に留まらない意義があることを指摘しておきたい。

（石原 力）

〔京都産婦人科医会 一九八八年 B五判 二八六頁 非売品〕

宗田一・池田光穂著『医療と神々―医療人類学のすすめ―』

本書は二部から成っている。第一部は異なった文化を有する民族間の健康観の違いを検討する素材として、古代日本、道教世界、古代インド、古代オリエント、ギリシア・ローマ、キリスト教などの「世界の医神たち」を紹介し、第二部は医療人類学入門篇として、この学問の目的や内容および研究方法を詳しく解説している。

筆者は今までいろいろな書物を読んでいるが、この本のような難解な本にお目にかかること（筆者の不勉強のせいかもしれない）は珍しい。それは、本書に述べられている思考方法が、我々医療関係者の思考方法とは大きく異なっていることと、つぎつぎに出てくる用語が医療関係の分野においては、使用されないものが多いので、これらを理解するのに相当な時間を要することが大きく影響していると思われる。

まず第一部に「世界の医神たち」を紹介した著者の意図をうかがおう。それは治療神には、ひとが病気になること、すなわち、病者、治療者、家族、共同体、病いに関する信念、あるいは心の安寧、治療の源泉など、およそ人々が考える健康についての観念が凝縮されているのだといっても過言ではない。健康を即物的な身体だけに還元する思考が主流になっている今日において、世界のいろいろな治療神への関心を強調することは、健康にまつわる豊かなイメージを取り戻すうえでも重要なことと思われる、と著

者は述べている。

次いで第二部では、医療人類学を「医療や医学に関する現象を人類学的方法論や理論的枠組みを用いて分析し、応用に役立てようとする諸分野」と定義し、この分野を一、理論的—生物医学的分野、二、理論的—社会文化的分野、三、応用的—社会文化的分野、四、応用的—生物医学的分野の四分野に分け、この分け方は私の考える医療人類学の宇宙論に基づいていると論じている。さらに今や我々は全体論的な知識をもつことが必要であると、「からだ」を例にして述べている。すなわち現代科学は「からだ」という現象を要素に還元してそれぞれ分析するが、どれも「からだ」に関する多様な現象すべてを説明していない。我々は「からだ」に関する全体的な知識を欲しているのに、現代の科学知識体系ではこれができないのである。したがって全体的な「健康」の把握を目指して、既成の諸科学の領域を共同しようとする学問であると強調している。

今日、本書で論じられている全体的な物のみかたの重要性は急速に高まっている。また先に書評を行った大貫恵美子著『日本人の病気観—象徴人類学的考察』はこの分野と密接な関連を有していると考えられる。そして上記のような病気または医療に関係した人類学関係の書物が最近現われるということは、これらの分野に対しての一般の関心が高まってきていることを示すとも考えられる。今後、保健医療および医史学の分野において、これらの本が全体的な視野にたつ新しい研究方法を導入する強力な刺激剤となることを心から願うものである。

〔平凡社 一九八九年 一九・五cm×一三cm 二七八頁〕

〔二〇〇〇年〕

〔杉田 暉道〕

レスター・キング著 館野之男監訳・千葉大学医学部山紫会訳
『医学思想の源流』

本書は Lester King: The Growth of Medical Thought, 1963, The University of Chicago Press, 254 p. の訳である。本書はその「はじめに」に記すように医学の歴史は思想史の一部であるとして医学の流れに影響を及ぼした概念(アイディア)をたどろうとする。時代背景のもとに、病気の原因を研究した代表的な先人を選んで、現代に通じる言葉によってその思想を浮きぼりにしようとする。

著者 Lester Snow King は一九〇八年生れ、ハーバード大学 MD 一九三二年、病理学専攻。ロックフェラー、プリンストン、エールを経てイリノイ大学クリニカルプロフェッサー、その後シカゴ大学。医史では The Medical World of the Eighteenth Century, 1958. その他があり、アメリカ医史学会長 一九七四—七六、昨年同学会制定の第一回功労賞を受けた。

本書はまず「プロローグ」において、歴史における説明、仮定などについての著者の方法を簡明に展開する。

第一章 宗教から科学へ アポロ、アスクレピオス、ヒポクラ

テス"では、西欧文明の源流であるギリシアを背景に、とくにヒポクラテス派について全集を引用しつつ著者の見解を述べる。第二章 精巧な理論 ガレノス、「能力」と「変化の問題」では、ガレノス学派と方法、四性質と四体液などについて詳述する。第三章 哲学的方法 パラケルスス"では、人文主義勃興期におけるプラトン、アリストテレス、ストア哲学の影響、魔術の概念、錬金術、オカルト術などの間におけるパラケルススの業績を述べる。

第四章 進歩と陥穽 ベサリウス、ハーベイ、ホフマン"では、近代医学への移行点としてのベサリウスとハーベイについてベーコンの方法論を引用して論ずる。臨床医学では、ホフマンをあげて一八世紀「体系学者」の思想を浮きぼりにする。第五章 細胞学説 現代医学への鍵 ブールハーフェ、シュワン、ロキタンスキ、ウィルヒョウ"では医学の理論と臨床は一八世紀末に始まり一九世紀に「細胞理論」を加えて盛り上った背景のなかに、ブールハーフェ、ロキタンスキ、ウィルヒョウの思想を述べる。

そして「エビローグ」では、以上のような体液、能力、生命原理、形而上学的概念、仮説的構造と機械的力などの要約を経て、今世紀初頭のオスラーを引用する。細菌学、予防医学の進歩をあげ、核医学、遺伝、分子病に至る。病気の分子理論も、やがてはさらに新しい概念によって置き換えられるであろう、医師はこうして考え方を変えつつけるであろうと結ぶ。

なお本書には、訳者による用語解説(例、アルケウス、クラシス、プネウスなど)七頁が記されている。また引用文献・注釈一六頁、事項索引四頁、人名索引三頁が付けられている。

通読して、病理病因に関して、時代背景のなかに先人の思想をとらえ、大きな流れを浮きぼりにする著者の手法は本書においても印象的である。

本書をもつてはじめて医史に接する学生には、最初は難解かもしれない。しかし再読すれば、あるいは学習教科書と併読すれば興味と理解は必ず得られよう。医学における大きな流れを示してくれる著作のひとつとして、英語文献に接することの多い昨今では、本書は親しみやすく、研究者や一般読者にもすすめたい。

訳者について特記されねばならない。訳者あとがき"によれば、千葉大学医学部一九五九年卒同級会である山紫会が卒業二〇周年の会の席上、二五周年に向けての記念事業として原著翻訳が決められ、ここに分担翻訳が成ったとのこと。訳者一覽(巻末)は医師として各方面に活躍の方々であって、本書上梓に心からの敬意を表したい。そして本書を学生、研究者、一般読者に広くおすすめしたい。

(栗本 宗治)

[西村書店 一九八九年 二九〇頁 三、四〇〇円]

ラルフ・W・モス著 丸山工作訳

『朝からキャビアを—科学者セント・ジェルジの冒険』

本書は、生化学者アルバート・セント・ジェルジ (Albert Szent-Gyorgyi, 1893~1986) の伝記である。ブタバスタで生まれたセン

ト・ジェルジは、一九一一年ブタベスト大学医学部に入学。在学中、第一次世界大戦に従軍、一九一七年卒業。一九一九年以降、ブラハ、ベルリン、ハンブルク、ライデン、フローニンゲン、ロンドン、ケンブリッジなどの各地の大学、研究所で研究。一九三一年にハンガリーに帰国。セゲド大学医学部医化学教授。セント・ジェルジは副腎から還元物質をとり出し、ヘキスウロン酸として一九二八年に発表。一九三一年、それがビタミンCであることを確認。細胞内呼吸の代謝の研究から、一九三五年C₄シカルボン酸説を提出。一九三七年、これらの研究でノーベル医学生理学賞受賞。一九三九年以降、筋収縮の生化学研究に進む。ミオシン、アクチン、アクトミオシン、ATPの関係を明らかにした。

一九三九年第二次世界大戦が始まる。一九四〇年代、セント・ジェルジは、反ナチ運動に加わる。大戦終了後、セント・ジェルジはブタベスト大学医学部生化学教授となる。セント・ジェルジは、はじめハンガリー共和国、ソビエトとすこぶる友好的であった。彼はモスクワに招待され、朝からキャビアを供された。題名はここから来る。しかし、状況は悪くなり、一九四七年アメリカに亡命した。アメリカで、セント・ジェルジはウッズホールに私的研究所を設立して研究を最後まで続ける。アメリカでの研究の中心は、ガンの研究、電子生物学研究であった。残念ながら、多くの成果は得られなかった。

本書は、二〇世紀の偉大な生化学者の研究成果を追うだけでなく、その裏面にも入り、女性関係、家族関係にも及び、彼の否定的な面もえぐり、そのうえで人間性豊かなセント・ジェルジ像を

浮き上らせている。副題に「科学者セント・ジェルジの冒険」とあるように、非常にダイナミックなセント・ジェルジのダイナミックな伝記であり、一気に読了することができる本である。調査がハンガリーにまで及んだ著者の努力は、医史学の中の生化学史史料としても耐え得るものである。たいへん面白かった。

(矢部 一郎)

〔岩波書店 一九八九年 B六判 二七七頁 一、八〇〇円〕

宮田親平著『ガン特效薬 魔法の弾丸への道』

これは抗ガン剤の今日までの開発・進歩の模様を、教養のある一般読者向けに、ていねいにたどって見せた本である。第一次世界大戦の毒ガスであるイペリットから発展したナイトロジェン・マスタードや、その構造を改変して、日本で開発されたナイトロミンなどのアルキル化剤をはじめ、代謝拮抗物質、抗ガン抗生物質、植物成分など、主要な薬剤群がつきつぎに登場し、免疫療法やホルモン療法も忘れられてはいないが、記述は一貫して物語風に展開して飽きさせない。

本書の特色の第一は、化学物質である薬剤を扱いつつながら、したがって必然的にある程度はその構造に触れざるをえないわけだが、構造式などは徹底して本文からは追放して、むしろつきつぎに登場する学者たちの苦心や悩みの跡を逸話などを交えながら追うことに力を注いでいる点であろう。

開発されて行く薬剤群やその臨床応用の記述を縦糸とするならば、こうした物語的な横糸を配することによって本書は織りなされている。このような手法で通した科学啓蒙書の先例は日本にもあるが、本書はもつとも成功したものの一つであろう。

ちなみに、構造式は本文末尾に、ナイトロミン関連の四物質のそれが添えてあるだけで、そのあとに「主な抗ガン剤一覧表」というものが付録として掲載されている。

特色の第二として、原点にまで溯ることなしには今日の成果は理解することが不可能だという考えのもとに、発ガンメカニズムの解明、化学療法、抗生物質、免疫学などについて、その創生期からの展開に触れていることがある。著者は「あとがき」の中で、外延を広げ過ぎて欲張ったものになってしまったかもしれない、という反省も述べていて、それもそれなりに理解できるが、このような脈絡抜きでは正統的な啓蒙は望めないという趣旨は尊重すべきものであり、また多くの場合にその解説は妥当といつてよいように思われた。

したがって、本書に多くは写真入りで登場するのは、直接抗ガン剤の開発史に不朽の盛名を馳せる内外の諸家に留まらず、ウィルヒョウ・コッホ・バストゥール・エールリヒ・メチニコフ・ワールブルク・ドーマク・フレミング・ワクスマン・パーネットに及び、山際勝三郎・志賀潔・秦佐八郎・佐々木隆興・杉浦兼松・中原和郎・吉田富三・天野重安・川喜田愛郎・杉村隆らの諸家もまたここに加わっている。

二〇世紀の医学を受け、その医学の進歩の少なからぬ部分を目

のあたりにしてきた読者にとっては、この顔ぶれはたんに壮観であるというに留まらぬ感懐を催すに足るものであろう。紹介者自身は、化学療法の始祖で、エールリヒ・ガンを作る一方で、選択毒性の概念を確立し、自らガンの化学療法までも夢みていた天才エールリヒに言及して、終章を「エールリヒの手のひら」と題した部分の含蓄に共感した。

薬学畑出身のジャーナリストである著者が、その素養とセンスを十分に生かしたといえる新潮選書の一冊である。

(三輪 卓爾)

『新潮社 一九八九年 B 六判 二五四頁 八八〇円』

ベネット・サイモン著 石渡隆司、藤原博、酒井明夫訳

『ギリシア文明と狂気』

本書は、ギリシア古典学と精神医学に通じた著者の二つの学問領域に対する関心が結合してできた原著『古代ギリシアにおける心と狂気』の半分ほどを訳出したものである。以下、主要な章の紹介と簡単な批評を述べる。

第一章の「ホメロスにおける狂気」では、『イリアス』『オデュッセイア』の作中人物の思考や感情、行動を解析し、全体に心の構造の観念がなく、それゆえ精神障害が心的な構造の異常や混乱に起因するという考え方のないことなどを指摘する。第二章の「ギリシア悲劇における狂気」では、悲劇の主人公たちの内面の

抗争、様々な葛藤、さらに臨牀的見地からも明らかに狂気と診断される事例を取り上げ、言語上の観点からばかりでなく、精神分析医としての立場からの解釈を展開する。この文学に関する二章は本書の中でもとくに興味深い。

第三章の「プラトンの狂気論」は、対話篇の中の魂に関する記述に基づいて魂の病いや狂気に対する考えを示そうとするが、哲学者自身も精神分析の対象とされており、両親の性交の場面を見聞した幼児期の体験から生まれた、いわゆる原光景的幻想こそ悪、狂気、そしてその特殊な形態としての政治的抗争や内戦などについてのプラトンの考え方を培った土壌とする。だが、思想史や社会的背景も詳述せずにごうごう見解を掲げると、プラトン哲学を個人的体験の所産としているかのような誤解を与えかねない。またプラトンを一徹な理性主義者とするが、『パイドロス』には狂気に対する賛美がエロス論とともに展開されているので、その狂気論はこういう一面とも整合性をもつ必要がある。この点で本書の論述は十分ではないように思われる。

第五章の「ヒポクラテスの狂気論」はむしろ当時の医学一般の狂気論というべきである。著者は、プラトンのそれが魂の構造に基づくのに対して、医学のほうのは人体の生理に依拠しており、精神的障害を身体的障害の中に見ていることを示し、ことにヒポクラテス全集中の『神聖病について』が精神機能を脳との関連から把握している点を高く評価する。

訳文についていうと、特殊な用語も一因となってやや読みにくい面もあるが、本文中に適宜配された訳注がそれを救っている。

難をいえば、プラトンの『政治家』を『政治学』としたり、『饗宴』と『シンポジウム』、ヘレンとヘレネの表記の仕方を統一していなかったりするのが気になる。また原著全体と訳出された六章との関連を解説してあれば、各章の全体における役割については著者の基本的な構想も、より明らかにしたのではないかと思われる。なお索引はやはり必要だろう。

全体として以上のように若干の問題点もあるが、本書がギリシアの文学、哲学、医学を現代の精神医学と関連つけて考説したことはやはり大きな意味がある。ギリシア古典や古代の医学史に関心のある読者は、本書から何かしら得る所があろう。

(岸本 良彦)

〔人文書院 一九八九年 B六判 二七〇頁 二、二六六円〕

柴多泰著『明治前期高梁医療近代化史』

序文に著者はこの本の執筆意図をこのように書いている。

本書は地方小都市に於ける明治期の西洋医療導入の歴史を叙述するが、本来医学史ではない。(中略) 本書は、明治前期の高梁の医師が、その地域において果たした役割を地方の近代化史、文化史、地方民衆史の中で位置付ける試みとして叙述される。

この本が本来医学史でないとするのは、著者の謙遜である。そしてこの本で述べられた内容が、現在中央で行われているような

人物本位の医学史ではないことを意味しているのであろう。偉大な医学者の発見・発明史が医学史の本流であると現在考えられている。しかし科学史あるいは化学史の分野においては、すでに社会の中で科(化)学史を考えようとする試みが、我々の学界に先行して行われていた。その現実を考慮する時、高梁という田舎町を舞台とした、社会的背景まで考慮した、優れた「社会医学史」といえるだろう。

著者は一九五五年生まれの、日本基督教団高梁教会に勤める牧師である。六年前に高梁に赴任した時、この中国山地の山深い田舎町に、教会が明治十五年という早い時期に設立され、他に類例のないほどに根を下ろし、その存在が地域社会と密接な関係をもって発展していた事実を驚いたという。そしてここに生活し、教会の歴史を調べる過程で、高梁の明治期以降の近代化の歴史にキリスト教会がきわめて大きな影響を与えた事実、とくに教育と医療に関しては非常に大きいと気づいた。そして著者の興味とする点が、たまたま医師会長尾島英之氏の注意を引き、医師会創立四〇周年記念誌として実を結んだのである。したがってこの本は、キリスト教の高梁への伝播とその普及を核に、近代医学の普及が述べられている。

ヨーロッパにおいて、病院はキリスト教の慈善から発生し、またキリスト教布教の際に医療が未開地で利用されることは、歴史上よく見られることである。高梁に明治十二年頃、自由民権運動の政治結社「開口社」が設立され、その中心メンバーであった柴原宗助・赤木蘇平らと、岡山県の学事・衛生掛であった中川構太

郎と岡山県病院の顧問であったJ・C・ベリーとの結びつきにより、高梁にアメリカン・ミッション・ボード系のプロテスタントのキリスト教が伝道されたのである。それとともにベリーは高梁施薬場で診察を開始した。キリスト教の普及と医療の近代化を関連させ、開口社、私立高梁病院、留岡幸助、高梁脚気病院、柴原宗助など、一地方にあった明治二十年代までの医療史を著者の発掘した山陽新報の記事を利用して描写している。

高梁という個性を主張する一田舎町を舞台に、明治二十年代までの医療の近代化とその背景を述べた好著である。

(石田 純郎)

〔高梁市医師会(二十七一六 高梁市向町四番地)発行
一九八九年 A五判 二六二頁 頒価四、〇〇〇円〕

清原重巨著 遠藤正治解説
『草木性譜・有毒草木図説』

本書は、清原重巨撰『草木性譜』天・地・人三巻三冊、同人輯『有毒草木図説』前後編二巻・附録二冊、計五巻五冊の復刻・解説本である。文政十年(一八二七)十二月セットで出版された。江戸後期から明治期にかけ、たびたび重版された。単色摺り版とあるが、復刻本は単色摺り初版本を底本としている。

著者清原重巨(一七七九〜一八四七)は、尾張藩士で、四百石を受けている。草木を好み、花卉を自家庭園で栽培し、花道にも

身を入れ、花道の一派靖流を開き、道生軒一徳と号した。字は君規、小字は磯次郎、のちに九十九と称し、通称武兵衛。清原家は、江戸時代から現在まで、舎人姓で通っている。

尾張では、宝暦・天明の江戸中期に、本草学の黎明期となり、江戸後期、その興隆は頂点に達する。その中心に菅百社があった。水谷豊文、伊藤圭介、大河内存真たちが中軸であった。本草学同好会である菅百社とその同人たちはおおいに活躍する。大窪藤菟庵、石黒濟庵、吉田高憲、大窪昌草たちである。同人たちの大部分は、尾張藩士または医者であった。重巨も菅百社同人である。

『草木性譜』は、重巨が多年、栽培、観察した植物のうち、性質が奇異なもの四五種を選び、同好者二八人の植物図に重巨の解説を付けたものである。解説の植物名は、漢名、音読名、和名を併記している。引用書は四六の和漢書で、中心は『本草綱目』である。解説文は、重巨の実地の知識に重きがおかれている。

『有毒草木図説』は、有毒植物九四種と小毒の植物二八種の図説である。『性譜』と同様、同好者三九人の植物図と重巨の解説で構成されている。本書は、『本草綱目』その他の本草書にのる有毒植物を日本産植物と照合同定しようとしたものである。植物名は、基本的には、漢名、音読名、和名を併記しようとしている。有毒植物だけの図説としては、日本ではめずらしいものである。重巨の解説は、短いものであるが、毒性に関しては、自己の知識を十分示している。

両書とも書図印鑑をのせ、植物図の落款印章の氏名を明らかに

している。いずれも尾張藩士で、菅百社同人たちの名が見える。両書は、江戸後期の菅百社の本草学を示すもので、それは、江戸後期の日本の本草学の状況を示すものといえることができる。

復刻本の解説は、成立の背景、著者清原重巨と家系、書図印鑑姓名、両書の内容からなる。解説者は、本草学史家で本学会会員の遠藤正治氏である。遠藤氏は、京都の山本亡羊とその息子たちを中心とした山本読書室、岐阜の蘭学・本草学、最近是小野蘭山や江戸の医学館関係など、すさまじい情熱で研究してきた方である。また、尾張本草学の研究にも励まれ、数多くの業績がある。解説は、これまでの蓄積と、この解説のための調査によりおおいに充実し、我々にとって、居ながらにして益するものである。

〔八坂書房 一九八九年 A五判 二七九頁 八、〇三〇円〕
(矢部 一郎)

長木大三著『北里柴三郎とその一門』

北里柴三郎の門弟の一人である野口英世の伝記はおびただしく出版され、各種の児童ものも含めて四〇冊とも五〇冊ともいわれている。この中で一応信頼のあるものは奥村鶴吉著『野口英世』、エクスタイン著『ノグチ』、筑波常治著『野口英世』など数冊にすぎないであろう。

師である北里柴三郎についての単行本は、昭和七年北里研究所から『北里柴三郎伝』が発行され、ついで高野六郎著『北里柴三郎』

が二回、滝田順吾著『北里柴三郎』、林謙著『北里柴三郎』など数冊にすぎなかった。さらに学者、研究者、ジャーナリストによって学術誌、一般誌、新聞などには随時掲載されてきてはいる。

現代医学の父であり、日本の誇る研究者、教育者、医政家として比肩する者もないほどに輝かしい足跡を残した北里を紹介する本格的な図書は近來刊行されていなかったが、ようやく長木大三著により昭和五十二年、竹内書店から『北里柴三郎』、同六十一年、慶應通信から『北里柴三郎』、そして今回『北里柴三郎とその一門』が刊行された。

著者は、前回までは北里の主要論文についてコメントを加えながら、北里の人間性、学者、医政家としての実践活動を主体として書かれた。本書は北里が八十歳で永眠するまでの素晴らしい足跡の一生は決して平坦なものでなく、波瀾万丈の難関に立ち向かう怒濤のごとき生涯であり、それを全うできたのは北里自身も不撓不屈の努力を怠らなかつたが、生涯を通じて佳き師友、後輩、家族に恵まれた幸運児であった。とりわけ多年にわたってあれだけ幅広い活動ができたのは、何といっても頼むに足る優秀な部下が支えとなっていたからで、今後これだけの傑出した識見ある人材の集う研究集団は一寸予想することができないほどである、と述べている。

本書はその数ある門下生の中で、北里の四天王と呼ばれた北島多一、志賀潔、秦佐八郎、宮島幹之助について著者のコメントを加えながら、これら高弟たちが北里をどのように見ていたか、それぞれニュアンスを異にしているのも描き出したかった。

これらの高弟とは著者自身も生前親しくお目にかかり、話しを聞く機会に恵まれる幸運が得られている。その他多数の俊英の中から野口英世、高野六郎、金井章次についても紹介され、それらは高弟の経歴を書き残したものの中から言説はなるべくそのまま摘記し、自伝資料のないものは第三者の筆になる記述を引用した。したがってこれらは一貫統一した文章から得る読後感とはおのずから異なつた読後感をもたれるはずと序言で述べている。

何はともあれ本書の刊行によって、わが国現代医学の発展にとって劇的ともいふべき北里の本格的研究が、本書を読まれる方に鮮明な印象を与え、真の偉人をこの書により知り得るものと信じ、一読をおすすめしたい。

(秋元 亀蔵)

〔慶應通信 一九八九年 A五判 二八五頁〕

二、九八七円〕

田辺普編

『江戸時代におけるくすり・医・くらし』

— 徳川理財会要の抜粋 —

『徳川理財会要』とは「慶長八年徳川家康が征夷大將軍宣下の日より、慶応三年徳川慶喜が政権を奉還する日に至るまで、およそ二六五年間にわたる幕府の財政に関する政令法規を、明治十一年、故大隈侯爵が大蔵大臣の時、同省記録局中に理財会要取調係

を置いて、事蹟の沿革を編纂したものである。この『徳川理財会要』の昭和七年の版本を入手された田辺普氏が、同書から「くすりに関する事項を主とし、これに医・救恤・福祉・生活などに関する事項を、この書物のページを追って抜粋し」て編集し、『江戸時代におけるくすり・医・くらし』（サブタイトルが徳川理財会要の抜粋）として刊行された。

内容は、職務、歳入、歳出、錢穀、地方、営業、外国通商の七門に大別されている。

医制および医療に関しては、たとえば歳出門で、明和八年の医学館経費につき、多紀某の給費金一百兩、薬種資金二百兩などの記録があり、医学館については、明和二年に多紀安元に神田佐久間町において一、五一八坪の地を貸付けて踏寿館をおこしたことから、寛政三年踏寿館を医学館と改称、天保十四年寄宿寮を設置するまでが略記されている。

また明和七年の町奉行所経費の中では、浅草と品川の囚人の養病院について、

銀三十七貫二百八十三匁二分五厘煎薬費

薬数一十四万九千一百二十九帖ニシテ毎帖ヲ銀二分五厘ト為ス

金三十兩朝鮮人参費

囚人五十二人ニ給与セシ価金ニシテ人参重量每一兩トス

とある。

同じ歳出門の疾病恤療の部には、編者が『赤ひげ診療譚』のモデルではないかと興味を示している「享保七年壬寅正月、市医小川笹船ナル者、施薬院ノ設立ヲ建議ス」を始め、計二三条が収録

されている。この中には、痘瘡、風疾、疫病、暴瀉病などの流行に対処したこと、朝鮮人参が買えないために、その茎や葉の服用を希望する者には下賜したこと、町奉行養生所医員の給賜額に関するなどが含まれていて興味深い。

くすりに関しては、地方門の物産の中に、薬圃と人参の記事があり、営業門には薬舗の部がある。当時の医薬品の栽培、管理、流通についてのたいへん貴重な原資料である。

さらに歳入門に、諸大名四時献品例格があり、「享保年間、諸大名一歳中幕府ニ献進スル品物ノ例規ヲ掲記ス」として、各国の城主の禄高と献進品の内容を記してある。これは当時の日本の有名物産の一大リストである。

編者は原書から抜粋するにあたり、各資料の末尾にその出典を明記しているので、研究者が出典を検索する手がかりとなりありがたい。そして、内容が医と薬に留らず、生活全般にわたって多岐なために、巻末に事項索引が添えられているのは親切である。

ちなみに編者は、現在、内藤記念科学振興財団の監事で、くすり博物館の顧問である。これだけの編纂の大作業を為しとげられたことに敬意を表する。

(浜田 善利)

[内藤記念くすり博物館 一九八九年 B 五判 三二〇頁]

非売品

速水融、齊藤修、杉山伸也編

『徳川社会からの展望—発展・構造・国際関係—』

全体をマスとして把握し、分析する研究方法としては、数学においては統計学、医学では疫学があるが、歴史学でも存在する。

プロソポグラフィもそれであるし、数量経済史もそれである。

数量経済史は史料から統計データを整備、それに基づいた観察と仮説の構築・検証を行い、従来の歴史的叙述の見直しをするという方法をとる。本書は数量経済史学者速水融氏の遺稿の記念に、弟子を中心に関連一四論文を集めて出版されたものである。

著者らは、明治以降の日本の発展に対する先行条件が、江戸時代の日本にある程度整っていたことを実証し、江戸時代「停滞」史観に疑問符を投げかける。数量経済史と歴史人口学の手法により、土地に縛りつけられ、搾取と飢餓と貧困にあえぐ江戸時代の農民のイメージは、流動性に富んだ生活上意欲のある存在に取って代わられた。また同様の手法を西欧諸国に行い、日本と比較することにより、日本の特徴が明らかになってくる。

さて、一四論文のうち、三論文が医学史的なものである。鬼頭宏(上智大)は、「近世日本の主食体系と人口変化」を論じた。従来の日本の食生活史は、記録の残りにくい人口の大部分を占める庶民の食生活よりも、公家・武士などの支配層・上層民に、また日常食よりも儀礼食に対象が傾きがちであった。一八八〇年前後の農事統計、一七三〇年頃の「諸国産物帳」を基礎に、江戸時代

の農民の主食を分析し、そして江戸時代の人口変化を考察している。

S・B・ハンレー(ワシントン大)は、「前工業化期日本の都市における公衆衛生」を論じた。江戸時代、江戸の人口は世界最大級であった。江戸では上水道はよく整備され、尿尿が肥料としてリサイクルされ、家畜は飼われず、当時の日本の都市の公衆衛生水準はヨーロッパと比較し良好であったことを強調している。そして現代の日本の下水道普及の遅れも、江戸時代の尿尿リサイクルシステムの成功に帰している。従来の日本の学界ではあまり思いつかなかった視点である。

齊藤修(一橋大)は「都市蟻地獄説の再検討—西欧の場合と日本の事例」を論じた。都市における人口増加と死亡率について考察している。前半でイギリスの一六—一八世紀の人口密度の高い大都市での高い乳児死亡率について論じ、人口密集地ほど死亡率が高い(ファアの法則)ことを論じた。後半日本についての分析はしかしながら無惨な失敗に終わっている。齊藤は一九世紀日本の乳幼児死亡の原因の大半を天然痘由来と考え分析したが、これは明らかでない誤りである。当時の乳幼児死亡の主病因は、細菌感染症であった。したがってイングランドの乳幼児死亡を論じた前半は問題ないが、日本を論じた後半は誤っている。

(石田 純郎)

〔同文社 一九八九年 A五判 三六二頁 四、一二〇円〕

新村拓著『死と病と看護の社会史』

書名を見て飛びついて読んだ本である。全体の構成は、第一部「医と病」、第二部「病と老」、第三部「看護と死」、第四部「死と葬送」からなっている。目次を見て、著者の研究分野の集大成の印象を受けた。しかし、読み終えた現在は、過去から未来に対しての大きな課題が提示され、新たな研究への出発の書でもあるように受けとめている。

それは「あとがき」に書かれているのであるが、この書の脱稿が終了してから御尊父様の在宅看護がいかに問題の多いものであるのか、身をもって実践、体験なさっているからである。末期医療・看護のあり方を論ずるのはやさしいことかもしれない。しかし、こと看護についてはその体験の有無によって、論じ方がたいへん異なってくると、私は考えているからである。終末期の看護は、人間の生の根源をゆるがされるような状況にしばしば遭遇する。そしてそれは、その時代の社会のありようと密接に関わっているのである。

そういった意味から、私はこの書の題名に飛びついたのである。

第一部「医と病」は、その研究の深さと内容の面白さにひかれた。とくに第三章「障害者を見る目」は記紀神話から現代までの障害者の社会での受け入れ状況の変化、障害者自身の障害の受け止め方の変化がよくうかがい知れて、たいへん勉強になった。こ

れからは環境（社会）の悪化によって障害者（先天的・後天的）は増してくるであろう。障害者を考える視野が広がったことに感謝したい。

第二部「病と老」は何度もくり返し読み、考えこんだ。とくに第三章「老と死を待つ生の自覚」では、一四二頁に「老とはまさに死に至る病である」というところに目が留まってしまった。これは、老や死・病に対する私の概念が軽薄なものであるからと気づくのにずいぶん時間がかかった。でもやはり、どう考えても悲しすぎる。人間誰しも迎える死であるならば、病とは考えたくない。老衰も病だろうかと……。そしてこの言葉は、私自身に大きな課題となって残った。

第三部「看護と死」、ここは二章に分かれ、仏教医学と看護の理念、尊敬ある死のための看護が論じられている。欲をいえば（私の願望）、キリスト教と看護についても項をおこして論じて欲しかった。現在日本で拡まりつつあるホスピスは、キリスト教と看護の知識なくしては、真の理解は難しいように考えているから。死の受容は、仏教徒とキリスト教徒では、どのような違いがあるのか常々勉強しなくてはと思っているから。宗教の理解なくして、真の死の看護はできないであらう。

第四部「死と葬送」は、「臓器の神秘性と物質化」、「死の個別化と葬送」の二章に分かれている。

第一章はもともと現代的な問題提起の章、二章は、誰もが体験する葬送を歴史的な見解から興味深く論じられている。紙数に限りがあって意を尽くせず残念であり、著者にも申し訳ないが、医

療従事者には必読の書であることを、声を大にして申しあげたい。

(山根 信子)

〔法政大学出版局 一九八九年 B六判 三〇三頁

二、八八四円〕